



## カルタ熱

今のようにパソコンやゲーム機がなく子供がたくさんいた昭和五十年代、わが家ではカルタやトランプ、花札などでよく遊んだ。中でも思い出すのは「動物スリーヒントかるた」。例えば、「①わたしはうさちゃんよ②黄色の服を着ているわ③なわとびをしている」という三つのヒントが出され、それに合った絵札を探すというもの。最後まで聞かないと取れないので、競争になったり、間違つて悔しがったりと、大いに盛り上がるカルタであった。

私が小学生低学年の時に「糸魚川ふるさとかるた」という郷土カルタが発売された。糸魚川の名所・名物・偉人などが紹介され、教育効果も高いカルタだったが、子供心に読み札の言葉が覚えやすく、絵もなかなか渋くて気に入っていた。「ぬながわの 底なる玉

は万葉集」「御風さん たずねたずねて良寛さん」「雪の雁木の 上刈みかん」「ぼっか 牛方 塩の道」「真光寺の大銀杏 黄金色」など、今でも、すらすらと言えてしまう。このカルタの文案指導に当たったのが、なんとわがコスモスの故松田護夫さんであり、発行人代表が現会員の松野功さんだった。

もちろん百人一首も大好きだった。親戚が集まるお正月には大人も子供も一緒になって興じたものである。兄弟の中で唯一の女の子だった私に叔母が「をとめのすがたしばしとどめむ」の札を教えてください、これだけは私のものとはりきつたが兄に取られて大泣きしたりもした。ちなみに兄の十八番は「みかさのやまにいでしつきかも」。食いしん坊らしく、どらやきの「三笠山」からの連想で覚えたのである。独自の叔母は皆に揶揄されながら「ころもかたしきひとりかもねむ」を十八番としていた。お正月が過ぎてても友達と百人一首の絵札で美人コンテストをして遊んだ。私は伊勢を、友だちは大式三位をグランプリに選んだ。歌の意味はほとんどわからなかったが、絵札は美しく珍しく、並べてずっと眺めていても飽きることがなかった。

その友達と二人でオリジナルの「百人一首」もどきを作ったのは小学校六年生の時。当然、歌といえるほど立派なものではない。「誕生会しているあいだに佐保の兄ねぼーっとあらわれ菓子ぬすみたり」などという、日常の出来事をふざけて詠んだだけのものだったが、二人で百首を考え、実際に絵札と字札を作り、他の友達を集めてカルタ会もした。自分たちで一から創造し完成させた喜びは大きく、楽しい思い出である。

さて大学生になったある年の冬休み、なぜか、小倉百人一首を自分で作ってみようと思いついてしまった。まず厚紙を切り、二種類の和紙を貼り合わせて札を作る。読み札・取り札合わせる二百枚が必要になる。気の遠くなるような話だが、当時はよほど暇だったにちがいない。札ができたら取り札の字札を作る。これは意外とあっさりできたが、読み札（絵札）の方は大変だった。極細の面相筆の穂先を尖らせ、米粒にでも書くように細かい文字を、慎重に書いていく。絵の方はさすがに筆書きを断念して鉛筆と色鉛筆で仕上げた。次第に直衣の袖の膨らみや十二単の裳など上手く描けるようになって

いった。こうして完成までに一か月を要し、その間三日連続で睡眠しなかった日もあったと記憶する。若さとはすさまじいものだ。

作った百人一首を大学に持っていくと、国文学科の仲間達に口々に賞賛され、得意になった私は、翌年第二弾、翌々年には第三弾と続けてカルタ作りにも励むことになる。年々素材や意匠・方法に改良を加え「カルタ職人」としての技術も向上し、最終の第三弾では満足のいくものが完成した。仲間からの評判も上々で、皆が卒業記念にと、絵札を持って行ってしまった。

そんなわけで、大学時代は馬鹿馬鹿しいほどの情熱を傾けて百人一首を三組も作ってしまった。これもカルタ好きが高じた「カルタ熱」のなせる業である。その後も教員採用試験を受験する際に「教職教養カルタ」を作ったり、教員になってからは生徒向けに「文語動詞活用カルタ」を作ったりしてしまふ私である。カルタは楽しい。カルタには夢がある。いずれ退職して暇になったら、第四弾を作りたいとひそかな野望を抱いている。(山下 佐保)

## 心の扉を開くとき

出会った頃、この人は十五歳だった。「私は、曲がつて真っ直ぐな縦の木町の外れのゴミ捨て場に立っている縦の木 大きいのか小さいのか分からないうきとトゲトゲの森から流されてきたのだろ 細くて堅い葉っぱで刺してやる 私ほづんと一本立っている縦の木」。

正確には思い出せないが、この人を調査していた私に、十五歳のこの人から手渡された詩には、こんな内容のことが書かれてあった。その後も、調査で会う度に、千切れた半紙に書いた金釘文字の詩を手渡された。

私の仕事は、犯罪を犯し家庭裁判所に送致された未成年者について、非行の原因や矯正可能性を明らかにすることだった。主たる業務は、心理テストや面接により、知能・性格・家族関係・生育歴・交友関係・犯罪歴などを調査すること。しかし私は、それよりも、彼女らの内的世界をまるごと理解することが本当の調査ではないかと考えていた。

この人はせつかく言葉という心の扉

を与えてくれたのだから、ひたすらこの人の詩に身を浸し、心の奥底にある世界を感じようとした。この人の言葉が生まれる前の世界を、自分の細胞一つ一つに浸透させ、私の中で生まれた短い言葉をこの人に返す、それを繰り返した。

有り体に言えば、私はこの人の詩に感動したのだ。文学とは無縁の世界にいた私に、詩の良し悪しはわからないが、自分の言葉で表現していることに驚き、感動したのだ。男女に拘わらず、非行少年と呼ばれてしまう人の多くは、幼い頃からさまざまに傷つく体験をしている。しかしそれを言葉で表現できる人はほとんどいない。この人が私に詩を渡したのは、拒絶ではなく理解されたいというサインだと思った。

詩に強い感銘を受けたこと。寂しい自分や孤独な自分を見つめていることは大人への架け橋であること。本当は父母が生んでくれたことを喜びたい気持ちがあること。社会から非難されても真っ直ぐに生きていこうと思つてのこと。そんなことなどを話したように記憶している。

この人のただ一人の係累である父方の祖母は、難聴で痴呆もあり保護者と

言える状態ではなかった。学校の担任や校長に面会すると、帰りがけには、「生徒がこの子一人だったら指導できますがね」と、苦渋とも皮肉ともわからない言葉を背中に聞いた。この人は孤立無援の状態だったが、調査・審判が終結してからは家庭裁判所とは縁が切れ、遊び仲間からも、その後この人の名前が出ることはなかった。

それから長い時を経て、この人から初めてのお便りをいただいた。

「調査員が私の詩を読み上げて、言ってくれた感想はよく覚えています。私は調査員という普通の人の中にも惨めで寂しい心があるのだと安心しました。世の中の人みんなハッピーで私のような独りぼっちはいないと思っていましたから。それからは、人に会うときには、私と同じように人には言えない悲しみを持つているのだと、親しみを抱くことができるようになりました。」

今も、数年に一度お便りをいただく。詳しい住所は書かれていないが、子供さんの近況なども書かれている。この人の孤立した世界と社会とをとなげる役割を少しでも担ったのだとしたら、私の出過ぎた行いも許してもらえらるだろうか。

(菊山 正史)

## 季節のたより

季節感がなくなった、と言われて久しい。七月初めのお店には、林檎と枇杷と葡萄が並び、その横に菊の花が売られている、といった具合だからだ。季節といえば、万葉集のこんな歌を思い出す。

冬ごもり 春ざり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山われは (巻一・十六)

天智天皇が春山の美と秋山の美とを競わせたときに、額田王が歌をもつて応えた長歌である。

五十年ほど前、高校生だった私は、「えっ、秋が優つとると？ 春じゃなかと？」とたいへん不思議に思ったものだ。しかし、四季のなかで好まれる春と秋を比べると、秋好みの人が多く、万葉集にも、春の歌より秋の歌のほうが数が多いとわかった。それでも春がいいという私の気持ちに変わりはない

った。千三百年も昔の万葉時代の春秋優劣論に異を唱えようとしたことが、今思うと、おかしい。

最近（といってもここ数十年）、私の季節感は故郷・熊本の水田地帯の季節感によるところが大きい。そして、ちよつと大げさに言えば、気候変動により水田地帯の季節感も変わり続けてきたことにも思い至つたのだ。

中学生の田植え指導をしてくれる農業委員さんによれば、近年の熊本の異常な暑さは稲にも悪いとのこと。

今年の熊本は、梅雨入りが例年になく遅く、やつと田植えが終わつたら梅雨前線が九州に停滞して大雨が降つた。植えられたばかりの早苗は水中に沈み、数日後水が引くと、まだ短く細い苗が見えるようになった。

わが家は兼業農家だったが、私は農作業には関わず、父が亡くなったあとわが家は農業をやめた。家庭菜園にも縁がない。しかし、通りがかりの畑から、「茄子と南瓜を持つて行きなせ」と声がかかるような土地である。田植えや農作業の様子を歌に詠もうと思うのは、私にとってきわめて自然なことだ。残念ながら、どう詠もうか四

苦八苦しているうちに、稲はどんどん

生長していつてしまふけれど。

毎日の暮しや身近な季節感、書き残さなければ、きつと忘れてしまうだろう。しかし、短歌を作り始めて四年、少なくともその間の生活や季節感は手元に記録として残ることとなった。

私にとって、季節感と短歌は切り離せないもの。そしてその季節感、田舎の水田地帯の季節感なのだ。万葉時代とは大きく変わってしまったであろう自然環境に苦しい思いも抱きながら。

(園田由美子)

### おとつとよ

先日、弟の十三回忌の法要があり、郷里越後の長岡へ帰省した。彼は、六十五歳の時に肺炎で亡くなった。

弟は七人兄弟の末っ子で、私とは二歳違い。他の兄弟とは年が離れていたため、いつも私と行動を共にしていた。銀行員だった父が四十二歳で亡くなったあと、乳呑み児を抱えて働きに出ることのできない母は、家屋敷にある売れそうな物は皆、換金した。二百年ほど続いた庄屋だったわが家の蔵の中の品々、庭木までも売り払った。十七歳の長兄を筆頭に七人の子供たちを育

てるのに必死だったのだ。もちろん、兄や姉たちは皆、高校卒業と同時に就職し家計を助け、大学まで進学させてもらえたのは、私と弟だけであった。

東京で大学生生活を送っていた私のアパートに、弟が予備校に通うために転がり込んできたのは、大学二年の春。以後五年間、六畳一間で一緒に自炊生活を送ることになる。食事当番は交代制でさぼらず、風呂屋の前の天麩羅屋の総菜もよく利用した。

その店の長女が弟に好意を寄せているらしいと感じたのは、一年ほど経った頃。弟に向ける視線は明らかに私へのそれとは違ったし、弟が買った袋には天麩羅が一枚余計に入っていたことも何回かあった。しかし弟はそんなことは認めず、異性の話もしない。真面目な弟は、相当奥手だったようだ。

東京に知人もいない地方出身者は皆、手探りで生活の基盤を築かなければならない。感謝の気持ちからか、弟は私の言うことには素直に従った。

五年後、郷里の銀行に就職が決まり、帰郷することになった弟は、「長らく大変お世話になりました」と丁寧に挨拶したのち、ややくだけた口調で「服従と忍耐の五年間だった」と、衝撃的

な言葉をつけ加えた。

時代は安保闘争などで不人気な岸内閣から池田内閣に代わり、「所得倍増計画」や「寛容と忍耐」などの言葉が脚光を浴びていた。弟はその池田首相の言葉を取ったに違いないが、彼なりの複雑な感情が込められていたのだ。

この六畳の部屋にはすでに、兄独特の感性や厳然たる秩序があり、自分とは逆らって生活することは難しいと。弟の気持ちに思いついた時、彼の控え目な性格に便乗して自分の都合のよい秩序を押しつけた、彼の事情を斟酌する度量の欠けていた自分に気付く、忸怩たる思いに打ち沈んだ。

しかし、その後実家の近くに家を建てた彼は、私が帰省するたび、実家に来ては食事を共にし酒を注いでくれた。自分は弱いくせに、私の酒に延々と付き合ひ、酔い潰れて床を並べて寝ることもしばしばであった。

弟よ、お前への借りはきちんと返すつもりだったのに、その機会は永久に失われてしまった。そちらで再会の時、「兄貴、相変わらず自分本位だなあ」と嗔われぬよう、心根を鍛え直しておかなければなるまい。会える日を楽しみに頑張るよ。

(長谷川重紀)